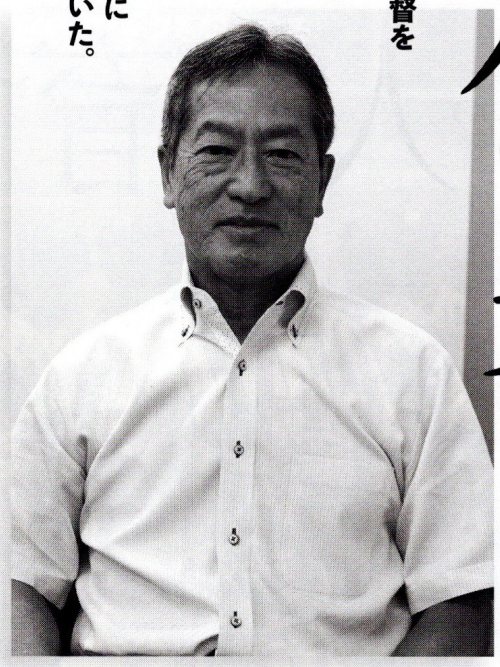
新理事長インタビュー

真野任史

［大阪府高等学校野球連盟理事長］

取材・構成＝佐野知香

大阪府の公立高校で40年以上にわたり野球部監督を務めてきた真野任史氏が、今年の3月に大阪府高等学校野球連盟の理事長に新たに就任した。少子高齢化が進み、高校野球を取り巻く環境も変わってきている中、これからを生きる球児たちに向けた思いを語っていただいた。



「切磋琢磨して『やっぱり大阪は強いな』と言われるようなチームをつくっていってほしい」

――長きにわたり野球の指導をしてこられましたが、心に残っていることはありますか。

真野　それぞれの学校でいろいろなことがありましたから特別これだというのはないのですが、自分のベースとしてあるのが大学時代の経験です。高校時代は野球がしんどくて、2年の時にはベスト8に行きましたが、楽しくなかったんです。3年の夏も「やっと野球が終わった」みたいな。でも、大学では自分たちで練習する環境に変わった。監督はリーグ戦の時にちょっと来るくらいで、全部自分たちで考えて、やって。それでも3回生のときに明治神宮大会に出ましたし、大学選手権にも行ったので、それぞれが一生懸命に考えながらやれば強くなれるんだと知れました。なので指導者として、楽しくとまでは言わないけど、預かった以上はやめさせないということが第一。選手にも3年間頑張ることを入部の条件にして、あとは人数が多くても平等に試合に出られるようにしたり、夏のメンバーを決める時も選手間投票で決めたりと、そういうふうにやっていました。

――選手の楽しさや主体性を大切にすることは、今でこそ多くの指導者の方が言いますけど、真野理事長が指導者になった頃はまだ広まっていなかったのではないですか。

真野　なかったですね。ただ、布施ですごく野球の知識を持っていたキャプテンがいて、その子を中心に選手同士で話し合いながらやっていて、チームも強かったんです。もちろん監督や指導スタッフがバックアップしながらなんですが、自分で野球がやれる、組み立てられる選手が半分以上そろったら強いチームになれると経験させてもらった。高校生でも考えて野球ができると分かって、それでそういう子を育てたいという思いを持つようになりました。勉強でもなんでも言われてやるだけなら絶対に身に付かない、自分でやらなければ意味がないということはずっと言ってきました。

――それが指導の根本にあったんですね。

真野　勝利も大事だけど、やっぱりそれだけではというのが自分の中にありますね。毎日の練習の中でどうやって取り組んでいくかとか、何を意識するかというのをちゃんとできている子は、社会に出てもきっと頑張ってくれるのではないかと思います。今年の春のセンバツで大阪桐蔭さんに帯同しましたが、キャプテンの子を中心に自分たちでミーティングをして、自分たちで動いていました。これをやられたら勝てんな、と思いましたね（笑）。教えられて野球をするだけじゃなくて、いろんなことを考えて、いろんなことを気遣い、気配りしながら野球をしているのが桐蔭さんの強いところ、指導者のすごいところだと感じました。そんなふうに主体的に取り組める生徒を、指導者には育てていってもらいたいなと思います。

――その大阪桐蔭をはじめ強豪校のそろった全国屈指の激戦区である大阪の高野連理事長に就任されました。

真野　去年、大阪からセンバツに出場しなかったことを結構言われましたからね（苦笑）。でもいないだけでニュースになるのは、それだけ注目されているということ。今年の春の抽選会では皆さんに、切磋琢磨してお互い頑張って「やっぱり大阪は強いな」と言われるようなチームをつくってくださいね、とお願いしました。その強さというのは、先ほど言った取り組む姿勢なども含めて大阪はすごいと言ってもらえるようないいチームであってほしいという思いです。

――高野連として、普及活動など何か取り組みを行っていますか。

真野　今年度は未就学児の野球教室を12月、1月あたりに予定しています。指導は基本、理事の先生方が行い、子ども1人につき高校生1人が付いて一緒に遊んでもらうというスタイルでやっていきたいなと考えています。また、5月に初めて新入生と保護者に向けた栄養講座を行いました。熱中症対策をどうすればいいか、コンビニで何を選べばいいか、試合の何時間前に食事を終えておくべきかなど、言われたままにやるのと知識を持って自分でやるのとでは絶対に違うと思います。だから、僕はずっとやりたかったんですが、保護者の方は来てくれましたが選手のほうはあんまり……。今後もっと広まっていってほしいと思います。

――最後に、これからの高校野球に期待することを教えてください。

真野　いつまでも高校野球が隆盛であってほしいというのは、思いとしてあります。ただ、加熱し過ぎるのはどうかと。今は昔のように野球しか選択肢がないわけではないので、多様なスポーツがある中で野球を選んでほしいなと思います。逆に言ったら、別のスポーツに行ってもいいし、何が自分にとって最高なのかを自分で選択してほしい。いろんなスポーツを見たりやったりしながら、それでも一番野球が楽しいなと思ってもらえたらうれしいです。

――そのほうが野球をより長く好きでいてくれるような気がしますね。

真野　関わった以上、最後まで野球をしてほしい思いもあるんですよ。ずっと言ってきたのは「自信を持って草野球のスーパースターになれ」。40歳でも50歳でも、還暦を迎えても草野球をやっている人はいますから、そういう人になってほしいな、と。そうやってずっと楽しむのが野球でもいいし、別のスポーツでもそれはそれでありかなと思います。

まの・ただし／1960年6月30日生まれ。大阪府出身。八尾高では主に遊撃手で2年夏に府8強。広島大では二塁手としてプレー。大学卒業後に教員となり、布施高の定時制の軟式野球部を指導した後、加納高に異動し男子バレーボール部監督を6年間務める。山本高で硬式野球部監督に就任し、以降は山田高、西野田工科高、千里青雲高で監督、部長を歴任。2025年3月限りで退任し、大阪府高野連副理事長を経て、26年3月に同理事長に就任。